

阿久悠『日記力『日記』を書く生活のすすめ』を読む -自身による日記の解説と読者への遺言-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学史資料センター 公開日: 2017-08-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 富澤, 成實 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/18813

阿久悠 『日記力』 『日記』 を書く生活のすすめ

め』を読む

——自身による日記の解説と読者への遺言——

富澤成實

はじめに

作詞家・作家阿久悠は二〇〇三年六月、『日記力』『日記』を書く生活のすすめ』（講談社プラスアルファ新書）という著書を上梓した。サブタイトルにもあるとおり、彼は同時代の読者に対して、日常生活のなかに日記を記す習慣を採り入れることを勧めている。他方で、同書のなかで、彼自身が日記を長期にわたって記していることを明かし、プ

イベートな記録であるはずの阿久悠日記について具体的に紹介した。晩年に執筆された『日記力』とは、阿久悠にとってどのような著述だったのだろうか。

I 『日記力』の執筆方法とねらい

『日記力』『日記』を書く生活のすすめ』について、「この本は語り、下ろしである」（傍点原文、「まえがき」と冒頭の一文で述べたあと、阿久悠はこの著書のねらいについて触れている。

日記に関する本の出版の話が持ち込まれた時、ぼくは、書くのではなく、語ることに拘泥わった。ハウツーも
のとか、マニュアル本を越えるためには、スラスラと方法論を書いては駄目である。多少ギクシャクして、遠ま
わりな感じがするとしても、ぼくのものの方や考え方、仕事のやり方や生き方までが集約されていなければな
らず、そのために語ることを選んだ。これはこれでエネルギーのいることであるが。（傍点稿者）

数々のエッセイや評論、コラム、テレビ番組の企画書や台本、加えて膨大な作詞や小説などを手掛けてきた阿久悠
にとつて、書き下ろし用として本書を「スラスラと」書くと、たとえば日記の効率のよい書き方といったものを読者
に示すような、いわゆるハウツーものやマニュアル本の新書が一冊できあがることになる。しかし、それは本意では
ない、と彼はいう。彼が読者に届けようとしているのは、自分の「ものの方や考え方、仕事のやり方や生き方まで
が集約され」た著書でなければならない、というのである。日記を書く生活を読者に勧めながら、彼のねらいは一方

阿久悠『日記力』『日記』を書く生活のすすめ』を読む——自身による日記の解説と読者への遺言——（富澤）

で、これまでの人生のなかで培ってきた仕事の方法や人生観、世界観など、つまり阿久悠の人間そのものや思想を正しく反映するような書物を完成させることだったのである。そのためには、考え考え、ときに立ち止まり、行きつ戻りつしながら、ポツリポツリと語るといった方法が必要だった。そのような遠回りで手間暇のかかるやり方によつてはじめて、阿久悠の人間と思想は、読者の前に的確に提示することが可能になるのだ、というわけである。あえて「書き下ろし」ならぬ「語り下ろし」(傍点原文)というスタイルで臨んだのは、このような理由からだった。

つぎに、本書が完成するにいたるまでのプロセスを簡単に見ておこう。いま引用した冒頭に続く一節と「あとがき」のなかで、それは触れられている。

平成十五年(二〇〇三年)一月七日、水曜日、六本木にあるぼくの東京の仕事部屋で、一回目の超ロング・インタビューを行った。いわば今年の仕事始めである。東京へは前々日から来ていたが、病院へ行ったり、何人かの新年の挨拶を受けたりで、本格的な仕事開始としてはこれが最初であった。

(中略) たかが『日記』という勿れ。六時間の饒舌を引き出すものがあるのだから、これは価値あることかもしれないとおもう。
(傍点稿者、「まえがき」)

約五カ月過ぎて、五月八日、木曜日、追加インタビューを、今度は伊豆にあるぼくの自宅で行う。

(中略) インタビューは三時間。

(同前)

「あとがき」は、平成十五年(二〇〇三年)六月四日、水曜日に書いている。

(「あとがき」)

刊行にいたるまでの過程を整理しておく。

- ① 二〇〇三年一月七日 六時間にわたるインタビュー⁽¹⁾
- ② 同年五月八日 三時間にわたる追加インタビュー
- ③ 同年六月四日 「あとがき」の執筆
- ④ 同年六月二〇日 発行

というようになるだろう。そして阿久悠が『日記力』の執筆に取り組んでいた二〇〇三年一月から六月にかけては、「病院へ行った」という記述からも少し窺えるように、彼にとつて闘病生活の時期とも重なっていたのである。

それではなぜ、はじめに触れたように、本書がハウツーものやマニュアル本ではなく、阿久悠の人と思想をも提示するものでなければならぬ、というのだろうか。結論めいたことをやや先走って述べるようだが、それはおそらく、彼にとつて本書がある意味で、遺言でもあったからである。とはいうものの、彼自身がこのようなことを直接的に述べているわけではない。しかし、本書の終盤で実際に、しばしば別の文脈ではあるが、「遺言」という言葉を用いてもおり、二年前に受けた癌の摘出手術以来、闘病生活のただ中にあり、またあとで触れるような世界の不穏な動きを本書に記してもいたのだ。こうしてみると、作詞をはじめ、小説・エッセイの執筆や、テレビ番組やイベントの企画・制作など、数々の仕事を手掛け続けてきた阿久悠ではあるが、こうした自分の仕事も、ついに「集約」（まえがき）させ、後の世代に残すべき時機が到来していることを、おぼろげながらであったにしても、半ば意識していたのではなかつただろうか、とも推測されるのである。

阿久悠『日記力』『日記』を書く生活のすすめ』を読む——自身による日記の解説と読者への遺言——（富澤）

II 阿久悠日記の方法

阿久悠日記は、一九八一年一月一日から二〇〇七年七月一日まで、二六年と七カ月にわたって記されたもので、それらはすべて明治大学の阿久悠記念館に保管されている。一冊で一年分を記す当日日記なので全部で二七冊、四四歳の誕生日を迎える一月ほど前から二〇〇七年八月一日に七〇歳で死去する二週間前まで、文字どおり毎日欠かさず記述された。

このような阿久悠日記のそれぞれのページは、それでは実際に、どのように記されたのだろうか。それは『日記力』のなかで、つぎのように具体的に説明されている。

ラジオから流れてくるニュース、あるいはテレビに映し出されるニュースは、ほんの瞬間です。文字どおり「あっ」という間に過ぎてしまい、夜になって日記をつけるころには記憶も薄らいでしまう。そこで、僕は、日記をつける以前に、自分のアンテナに引っかかってきたことや思いついたアイデアは、すべてメモにして残すことにしています。このメモが日記の第一段階となる。

そのため、ハガキ大のメモ用紙を居間、寝室、書斎、車の中、オフィスのデスクの上と、あらゆる場所に置いていきます。(中略)

仕事が落ち着いた夜の十一時ぐらいになると、各部屋のメモを集めてきて、ひととおり目を通して、日記の準備を始めるわけです。

(第一章)

一般的に日記は、一日の終わりの就寝前に、その日に起こった出来事を想起しながら、思いつくままにその場で記述するものだが、阿久悠日記は大きく異なっている。彼の日記には、日記そのものを記すための準備の段階が設けられており、それがこうした適宜メモをとるといふ作業に当たる。新聞やテレビ、ラジオを見たり聞いたりするなかで、彼が関心を向けた情報をその都度メモし、また作詞や小説などの創作のアイディアやヒントをメモに書き付けておくという、周到な準備段階を踏んでいることが特徴のひとつだといふことができるだろう。こうした作業も日記を書く行為の一環だとみなせば、阿久悠の壮年期以降は、作詞や小説の執筆などの創作活動やその他のテレビ関係の仕事を除いて、日記のためにかなり長い時間を充てていた人生だった、ということになるのである。

こうして書きためられたメモは、しかし、すべて日記のなかに記されるわけではない。『日記力』なかで、阿久悠は続けてこう述べている。

日記に書くことは一ページに決めました。

一ページに決めることによつて定員ができる。ページに収められたネタは、まあ、五つくらいだろうと、つまり、五つしか合格しないという条件をつけるわけです。そうすると、たとえば、その五つを決めるために、七つあつた素材の中から二つを落とさなければならぬことになります。その落とすという作業を行うことで、その日のニュースが、頭の中に入ってくるという仕組みです。

最終選考が終わると、今度は残つたこの五つの中から、自分が「この日一番大切だったな」と思うことをトップに書いていくわけです。

(第二章)

阿久悠『日記力』『日記』を書く生活のすすめ』を読む——自身による日記の解説と読者への遺言——(富澤)

メモをとるといふ第一段階に続くのは、このように収集した複数のメモを、取捨選択するという作業である。それは、素材を自分の頭のなかに整然と収めるために必要な作業だといふのだから、実益を計算したうえで戦略的な行為だといふことができる。そのあとで、今度は重要度に応じて記述の順番を決める、という。

「順番が決まると、見出しをつけて、見出しの下には赤でラインを引いて、少々の説明を記事的に加えていきます」（第三章）と書かれているように、つぎの作業は、記述する話題や記事に見出しをつけることと、日記の紙面のレイアウトを工夫することである。新聞や雑誌の見出しをそのまま使うのではなく、原則的に「余ほど疲れていないかぎり、自分の言葉で見出しを書」（同）くのだという。また見出しには赤色の筆記具でアンダーラインを引くなど、日記の記述内容を際立たせるための工夫も行う。「日記といえど、この一ページのために内容だけでなく、紙面構成に至るまで、さまざまな技術と作業が必要となります」（同）と自らが述べたとおり、阿久悠日記には、高度な技術が駆使され多大な労力が注がれているのである。そしてこうした「相当計算ずくで特殊な作法」は、「長年歌謡界でやってきた方法と相通じるものがある」（同）るといふように、阿久悠日記は、彼がヒット曲を歌謡界に送り出すのと同様に方法的に相当に練られており、それに従って日々、システムティックに記述された日記だといふことができるだろう。

『日記力』の当初のタイトルは、「真夜中の一人編集会議——ぼくの日記学」（「まえがき」）だったことを、本書のなかで明かしているが、まさに彼は宣弘社の会社員時代にはコピーや企画書を作成するなかで、また作詞家として数々のヒット曲を世に送り出すなかで、あるいは「スター誕生」などのテレビ番組をプロデュースするなかで、それぞれに培ってきた技術を総動員しながら、毎夜就寝前に「一人編集会議」を開きながら日記を書いてきたのだった。それも二六年半もの長きにわたって、一日も欠かさず毎日、であった。天才だが、努力の人でもあったのである。三田完

は、「趣味などという軽々しいものでなく、僧侶が朝夕に経文を誦するのと同様、(行)とでも呼ぶべき行為のような気がしてくる。あるいは(日記道)といつてもいいだろう」と指摘した。疲労困憊し、あるいは病に冒されているときでさえ毎日記した日記はまさに、阿久悠が自らに課した厳しい修業のひとつだった、ということができよう。

Ⅲ オリジナルな日記を書くために

阿久悠はオリジナルであることに、強くこだわった人だった。たとえば、作詞の仕事においてそれまでのものとは趣の異なつた歌詞を書くことを目指し、そのことによつて数々のヒット曲を生み出してきた作詞家だが、それは日記に関しても同じだったようである。『日記力』のなかで、彼はつぎのように書いている。

誰もやらない日記を書くために、どうすればよいのか。悩んだときに役に立ったのが、「作詞憲法十五カ条」です。これは、僕が、作詞家になるときに、それまで誰も書いたことのない、歌謡曲を書こうと、決めてつくつた作詞のためのルールです。

(第二章)

オリジナルな日記を書くために、阿久悠は自分がかつて作成した「作詞憲法十五カ条」を参考にした、という。いま引用した一節に続けて、この「作詞憲法」を紹介しているので、まずはこちらから見ていこう。

1 美空ひばりによつて完成したと思える流行歌の本道と、違う道はないものであろうか。

阿久悠『日記力』『日記』を書く生活のすすめ』を読む——自身による日記の解説と読者への遺言——(富澤)

- 2 日本人の情念、あるいは精神性は、「怨」と「自虐」だけなのだろうか。
- 3 そろそろ都市型の生活の中での、人間関係に目を向けてもいいのではないか。
- 4 それは同時に、歌的世界と歌的人間像との決別を意味することにならないか。
- 5 個人と個人のじつにささやかな出来事を描きながら、同時に社会へのメッセージとすることは不可能か。
- 6 「女」として描かれている流行歌を、「女性」に書き換えられないか。
- 7 電信の整備、交通機関の発達、自動車社会、住宅の洋風化、食生活の変化、生活様式の近代化と、情緒はどう関わりを持つのだろうか。
- 8 人間の表情、しぐさ、習癖は不変であろうか。時代によってまったくしなくなったものもあるのではないか。
- 9 歌手をかたりべの役から、ドラマの主人公に役替えすることも必要なのではないか。
- 10 それは、歌手のアップですべてが表現されるのではなく歌手もまた大きな空間の中に入れ込む手法で、そこまでのイメージを要求していいのではないか。
- 11 「どうせ」と「しよせん」を排しても、歌は成立するのではないか。
- 12 七・五調の他にも、音的快感を感じさせる言葉数があるのであるのではないだろうか。
- 13 歌にならないものは何もない。たとえば、一編の小説、一本の映画、一回の演説、一周の遊園地、これと同じボリュームを四分間に盛ることも可能ではないか。
- 14 時代というものは、見えるようで見えない。しかし、時代に正対していると、その時代特有のものが何であるか、見えるのではなからうか。
- 15 歌は時代とのキャッチボール。時代の飢餓感に命中することがヒットではなからうか。

(第二章)

長い引用となったが、このように「ある一定のルールを決めることで、それまでにない、オリジナリティのある新しい歌をつくってきた」(第二章)と続けて述べている。これは具体的には、どのようなことなのだろうか。ここでは、第一、二、六、一一条に限定し、これらの条項によって、たとえば、どのような新しい女性像が日本の歌謡曲のなかに登場することになったのかを、都はるみが歌った「北の宿から」について、阿久悠自らが述べた解説を見よう。

しかし、これは、たくらんで、へ女心の未練でしょう……なのである。「か」が付くのと付かないのでは、主人公の自立意識がまるで違ってくる。ともに未練を感じているという意味では同じのだが、前者は誰かに向かって答えを求めているのであり、後者は自分自身が捨てきれない未練を、いくらか厭がっている。そのくらい違ってくる。

(中略) ベシヨベシヨと泣き明かしてもこの女性は、きっと翌日、自分の考えでどこかへ行くに違いない。⁵

この女性は「女心の未練でしょうか」(傍点稿者)と判断を人に委ねるのではなく、「女心の未練でしょう」と自らの弱さをあえて認め、そして人生の再出発を自らに期したのだ、という。このように阿久悠は、「怨」や「自虐」(ともに第二条)、「どうせ」や「しよせん」(ともに第一条)、そしてそのような「女」(第六条)たちで成立していたそれまでの「流行歌の本道」(第一条)に倣うことなく、主体的で自立した「女性」(第六条)を、この「作詞憲法」に基づいて歌謡曲のなかに誕生させ、その結果、新しい女性を主人公としたオリジナルな歌詞を歌謡曲の世界にもたらしただった。

阿久悠『日記力』『日記』を書く生活のすすめ』を読む——自身による日記の解説と読者への遺言——(富澤)

しかし、その一方で、阿久悠が用いた「ルール」という言葉にも注意しよう。この「作詞憲法」は、新しい歌詞を書くための作法であると同時に、作詞家である自分に対して自らが課した、一種の規律でもあったのだ。このことは、自らの人生を振り返って記した『生きつばなしの記 私の履歴書』のなかで明瞭に述べられている。

当初からずっと言いづづけてきていた「歌謡曲らしくない」とか、「歌らしくないもの」を、具体的に理論武装する必要が生じてきたのである。今まで誰も書かなかつた匂いの歌を、偶然の隙間探しではなく、作詞家阿久悠の思想、個性として固める。窮屈でもそれにのつとつて書く。それが阿久悠の詞であることを確立させる。⁽⁶⁾

この「窮屈でもそれにのつとつて書く」という一文について、吉田悦志は「いかにも阿久悠らしい決意である」と述べている。阿久悠の長編小説『無冠の父』のなかに、二歳の健太が、巡査である父の行動を模して、毎朝村役場に「戦闘帽と赤襪^{よすき}」を身に付けて顔を出し、女性事務員から出されたお茶を飲んで、悠然と役場を後にする場面がある。⁽⁸⁾ この場面について、同じ論文で吉田悦志は、「幼いながらも、「規範」意識を美とする知的なダンディズムをこの時、小説の中ではあれ、確かに、二歳の健太つまり深田公之は身に付けていた」と論じた。⁽⁹⁾ 早くも幼児期の阿久悠のなかに窺えるこうしたスタイルは、それから約三〇年後、三〇代となった阿久悠が作詞家として本格的に立とうとした際にも、やはり同じように反復されたのだった。「窮屈でもそれにのつとつて書く」という決意がいかにも阿久悠らしいというのは、このようなわけである。

さて、誰もやらない日記を書くためのルールについて戻ろう。「作詞憲法十五カ条」を参考にして作ったという「日記憲法五カ条」を、阿久悠は『日記力』のなかで提示している。それはつぎのようなものである。

- 1 いい子でもなく、悪い子でもなく、冷静な観察者としての日記というものは成立しないのだろうか。
- 2 レストランのメニューから米大統領の演説まで、およそ興味を覚えたものは、同格に書けないものか。
- 3 日々の不快を排除したら、それはもう日記と呼べないものであろうか。
- 4 受けるものと、発するものと、一ページの中でたたかわせられないか。
- 5 今日があり、世界があり、そして、自分がありという書き方ができないか。

(第二章)

こうして阿久悠は作詞家としての活動を始めたときと同様に、日記を書き始めるにあたって「日記憲法」を自ら制定し、「窮屈でも」この規範に則って毎日の日記を認めてきたのだった。

Ⅳ アンチロマンの日記

先の「日記憲法五カ条」に則って記されたオリジナルな日記について、『日記力』のなかで阿久悠は自ら、「いわばアンチロマンの日記といえるでしょう」(第一章)と述べている。阿久悠日記の最大の特徴は、まさにこの点にあるといつてよい。

「日記憲法五カ条」の第一条に、阿久悠は「いい子でもなく、悪い子でもなく、冷静な観察者としての日記というものは成立しないものだろうか」と記したことは、すでに触れた。確かにこれまで、「いい子」ないし「悪い子」としての日記が多く書かれ、あるいは「日々の不快」(第三条)を率直に吐露するような日記が多く記されてきた。樋口一葉の日記と国木田独歩の「欺かざるの記」と並んで、明治期の青春の実態を写す三大日記と呼ばれる日記のひとつ

阿久悠『日記力』『日記』を書く生活のすずめ』を読む——自身による日記の解説と読者への遺言——(富澤)

として石川啄木の「ローマ字日記」がよく知られているが、それを含めた一三冊の啄木の日記を概観すると、同じようなことをいうことができるだろう。

石川啄木は、満一六歳の「秋籥笛語しゅうがくてきご（白蘋日録はくひん）」（一九〇二・明治三五年）から満二六歳の「千九百十二年日記」（一九一二・明治四五年）までの一〇年間に、一三冊の日記を書いている。その初期と後期の日記の間には、大きな落差がある。たとえば、「秋籥笛語」の「序」は、「運命の神は常に天外より落ち来つて人生の進路を左右す。我もこ度其無辺際の翼に乗りて自らが記し行く鋼鉄板上の伝記の道に一展開を示せり」といった、技巧を凝らした文語体で書き始められている。それに対して、「千九百十二年日記」の最終ページとなる二月二〇日は、「日記をつけなかつた事十二日に及んだ。その間私は毎日日熱のために苦しめられてゐた。三十九度まで上つた事さへあつた。さうして薬をのむと汗が出るために、からだはひどく疲れてしまつて、立つて歩くと膝がフラ／＼する。／＼さうしてゐる間にも金はド／＼／＼なくなつた」という、飾り気のない通常の口語体で記されている。池田功が指摘したとおり、全一三冊の啄木日記を見渡すとそこには、「一六歳の前途洋々たる気取りに気取つたものから、一家が病に倒れ困窮し、どうにもこうにもならなくなつた絶望的な状態を、虚飾を廃した文章で記した二六歳の日記への変化」があることを確認することができる。

このような一三冊の啄木日記の魅力について、池田功は別の著書で、三点挙げたうちの最初に、「極めて正直に赤裸々に記されている」点を挙げてゐる。また同じように、啄木日記に見られる赤裸々な自己告白の表現に強い感銘を受けたのは、ドナルド・キーンだった。

ドナルド・キーンは名著『百代の過客 日記に見る日本人』および『百代の過客（続） 日記に見る日本人』のなかで、中古の『土佐日記』や『蜻蛉日記』から近代の木下杢太郎日記や永井荷風『新帰朝者日記』まで、実に一〇〇

編以上の日記を検討の対象とした。そのなかでも彼は、「明治時代の文学作品、私が読んだかぎり、私を一番感動させるのは、ほかならぬ石川啄木（一八八六—一九二二）の日記である」と述べ、啄木日記を最も高く評価したのだった。啄木の言動には矛盾がけつして少なくはなく、彼は仕事を中途半端に放り出したり、金銭感覚においてルーズであつたりもした。あるいは彼の作品には傑作がある半面、みすばらしい駄作も実際にありはした。このように啄木には天才に特有の欠点というものがあつた、といわざるをえない。しかしながら、ドナルド・キーンは、啄木が日記のなかでこうした影の部分をも含めて自分自身の姿を克明に描いた点を評価して、「日記の中で、近代日本文学でおそらく最初の、真に肉付き豊かな人物を、創造するのに成功した」と賛辞を呈したのだった。そしてこのような人物の造型を可能にし、「彼の日記をとりわけ感動的にしているのは、まさにこの作者の、赤裸な自己表現」にほかならなかつたと論じた。

このような啄木日記に窺える赤裸々な自己告白的表現ということに関しては、たとえば「ローマ字日記」のなかの、つぎのような有名な一節（一九〇九年四月一〇日）を挙げることができよう。

いくらか金のある時、予は何のためろうことなく、かの、みだらな声に満ちた、狭い、きたない町に行った。予は去年の秋から今までに、およそ十三—四回も行った。そして十人ばかりの淫売婦を買った。ミツ、マサ、キヨ、ミネ、ツユ、ハナ、アキ……………名を忘れたのものもある。予の求めたのは暖かい、柔らかい、真白な身体だ。身体も心もとろけるような楽しみだ。しかしそれらの女は、やや年のいったのも、まだ十六ぐらいのほんの子供なもの、どれだつて何百人、何千人の男と寝たのばかりだ。顔につやがなく、肌は冷く荒れて、男というものは慣れきつている、なんの刺激も感じない。

阿久悠『日記力』『日記』を書く生活のすすめ』を読む——自身による日記の解説と読者への遺言——（富澤）

後続する文章の引用は省略するが、このように日記には自分の買春体験が赤裸々にかつ具体的に記述されている。顔につやがなく、肌が冷たく荒れた売春婦たちは、啄木によつて単に醜いだけの女性として扱われている。しかし、醜い存在として扱われているのは、彼女たちばかりではない。彼女らを幾度となく求めざるを得なかつた自分自身もまた、同様に醜い存在として扱っているのである。このように自分の醜悪さをも含め、自己を赤裸々に丸ごと描いた点が啄木日記には特徴的である。

阿久悠日記は、このような啄木日記とはおよそ対照的で、阿久は自分の心に生起した喜怒哀楽といった感情を、強く抑制しながら書いているようである。むしろ彼もまた人間であるので、激しい感情をもたなかつたはずはない。しかしそれを日記の表面に出さないようにしながら慎重に記述しているのが、この日記の最大の特徴は、先にも触れたとおり、アンチロマンの日記だということができらう。もつとも、啄木が日記を書いたのは、満一六から二六歳の、人生のなかでも最も多感な時期であり、それに対して阿久悠日記は四三歳から開始されたものであつて、精神的にもある程度安定する壮年期以降のものであるという、記述した際の年齢の違いについても考慮しなければならぬことはいうまでもない。

感情を抑制したアンチロマンの日記に関わることをして、父・阿久悠について語つた深田太郎のつぎのような証言がある。

この日記を読んで改めて感じたのは、父はずつと「阿久悠」だつたんじゃないか、と。むしろ、本名の「深田公之」^{ひふゆき}だつた姿を見たことがないんです。とてもやさしいひとでしたけれど、僕は父との関係でどこかいつも緊張していた気がします。「家にいる時ぐらい、深田公之でいさせてくれよ」という態度は一切見せなかつたです

ね。それは、日記という究極的にプライベートな空間でも同じだったわけです。決して「阿久悠」から離れなかつた。⁽¹⁸⁾

父は自宅においてもそうだったが、日記を読んでもそのなかでも同じように、作詞家・作家阿久悠だったのだと感じた、という発言はとも興味深い。吉田悦志が『無冠の父』の登場人物である二歳の健太のなかに、幼い深田公之と阿久悠の「規範」意識を美とする知的なダンディズム」を看取したことは、すでに述べた。同じことは、日記についても言えるだろう。このような阿久悠の美学はまた、日記のなかでも、基本的に貫かれていたのだった、と。

いま、感情を極力抑制したアンチロマンの日記というように述べた。しかし、阿久悠日記は世の中で起こった出来事を、単にそのまま日記のなかに写し取っただけのものというのでは、むろんない。先に、阿久悠日記の第一段階にあたるメモ書きについて触れた際に、彼がテレビやラジオを視聴しながら、「自分のアンテナに引かかかってきたことや思いついたアイディアは、すべてメモにして残すことにしている」（『日記力』、第一章）ることを述べた一節を引用した。このように阿久悠日記は、阿久悠という一人の人間が関心を抱き、興味をもった出来事について記述する日記である以上、情緒を出来るだけ排除した客観的な記述のしかたでありながら、自ずと阿久悠という、個性をもった人間がそこに表われないわけがないことは、改めていうまでもないことだろう。したがって、阿久悠日記は単なる時事的な記録でも備忘録でもない。

これまで、阿久悠が日記を始めるにあたり制定した「日記憲法五カ条」をめぐって考察を進めてきた。詳しく触れることはできないが、たとえば、第二条や第五条で記されたことは、エッセイや評論を含めた阿久悠のすべての創作の仕事に通じることもあるだろう。自分が生きているこの時代とはどういう時代なのか、この時代のなかで生きて

阿久悠『日記力』『日記』を書く生活のすすめ』を読む——自身による日記の解説と読者への遺言——（富澤）

いる自分とはどういう存在なのかを常に問い続け、そしてその時代の姿や特徴といったものは、たとえば一見些細なことに見える出来事のなかに出現することがあると確信して、政治や経済上の問題にだけ目を向けるのではなく、スポーツや芸能、娯楽にまで視野を広げて刮目し、しかもそれらを同列に扱う視点を持ち続けた人物である。そういう観点から記された日記という点で、阿久悠日記はオリジナリティーの高いものだといえることができるだろう。さらに、いま述べたように、スポーツや芸能上の出来事をも詳細に記述した阿久悠日記は、一九八〇年代から二〇〇〇年代にかけてのわが国の三〇年間でどのような時代だったのかをトータルに明かす、貴重な史料であるといえることができる。

V 日記の公開と解説書としての『日記力』

阿久悠自身は日記の公開について、どのように考えていたのだろうか。『日記力』のなかに、「僕にも少し新しさがあるとするのなら、それはきつと、非公開を前提とした日記ですら、客観で書くということでしょう」（第七章）という一文があり、そこで日記は一般的に「非公開を前提」として述べていることが述べられているので、阿久悠日記についても公開する意図はなかったようにも考えられる。が、果たしてそうだろうか。

ところで、先にも取りあげた石川啄木の場合、自分の死後に日記が公開されるという意識は、啄木の心のうちに少なからずあつたようである。当時の函館市立図書館長・岡田健蔵と並んで、啄木日記の保管と公刊に深く関わった宮崎郁雨は、本名の「宮崎大四郎」の署名のもとに、『石川啄木日記 第一巻』の序文で、「節子さんは其時既に天命あと幾何も無いことを諦念してゐたものの如く、唯一の形見だと言つて啄木の書いた日記を私に遺すことを約束され

た。『啄木が焼けと申しましたんですけれど、私の愛着が結局さうさせませんでした。』と言つた其折の言葉を私は今猶明らかに覚えてゐる¹⁹」と書いている。この証言によると、節子は結局、夫の言葉には従わなかつたので今日の我々が啄木の日記を読むことができるわけだが、啄木自身は生前、日記の焼却を妻に命じていた、という。同じ序文のなかで宮崎が触れていることだが、啄木が自分の死後に日記の焼却を望んでいたことは、啄木と親交の深かつた金田一京助と丸谷喜市（函館出身の経済学者）の両者もまた承知していたことだ、という。同じことは、この序文に続いて同書に掲げられた、石川正雄（啄木の娘婿）の「日記公刊まで」と題した文章のなかでも、「啄木の心友金田一、丸谷両博士が啄木の生前、自分の死後には焼却してほしいといふ希望を聞かされたといふことを間接に耳にした²⁰」というように述べられているので、啄木が日記の公開を望んではいなかつたことは、確かなことのように推測される。しかし、全一三冊のうち、「かなりのものは読まれることを前提に書いていた²¹」と池田功は指摘している。委細は避けるが、たとえば「ローマ字日記」は、第三者にも理解しやすいように、描写が客観化されていたり、細かな説明がされていたりしており、「創作化」（同前）の痕跡が窺える、という。そうであるとすれば、啄木はある程度、読者の存在を意識しながら日記を綴っていたと考えても間違いではないだろう。

啄木の日記のみならず、そもそも日記というものが公開を前提に記されているということについて、Donald・キーンは、先にも触れた『百代の過客 日記に見る日本人』の序文で、つぎのように鋭く述べている。

他人の目に触れることを恐れて、どれほど万全の配慮をしてみても、いつかは、誰かに読んでほしいという気持ちも、どこか心の片隅に、必ず働いているにちがいない。日記をつけるのは、詩を書くのに似て、一種の告白的行為であることが多い。そして告白というものは、誰かそれを聴いてくれる者がいなければ、なんの意味も持

たないのである。⁽²³⁾

このようにしてみると、啄木の場合に限らず、備忘録の類を除いて、日記を書くという行為には告白の衝迫が自ずと含まれており、およそ日記というものは本来的に、それが無意識のものであるにせよ、公開を前提に記されていると考えても、あながち間違いいではないようにも思われてくる。

阿久悠日記について戻ると、先に引用したように「非公開を前提とした日記」と書く一方で、同じ『日記力』のなかで、「もし、僕がこの世を去ったら、阿久悠研究とかなんとかいって、誰かがこの日記を開いたら、「この人は随分と悩みのない人だな」と思うに違いない」(第五章)と書いてもいる。基本的に「アンチロマン」だった日記に、新たにロマン的な要素が加わることになった経緯について語った文脈のなかで、断片的につぶやかれた一文に過ぎないが、一方で彼が自分の死後に日記が他者に読まれることを想像してもいたことを示す、看過することのできない重要な箇所でもあるだろう。そして、このように自分の日記が阿久悠研究の一環として用いられることを半ばであれ意識していたとすれば、晩年に記した『日記力』という著書は彼にとって、自分の死後、日記が第三者に正しく理解されることを心のどこかで願って書かれた、阿久悠日記のための解説書でもあったというになるにちがいない。

事実、阿久悠日記は、まずメモ書きという第一段階から開始し、就寝前になるとそれらのメモを集め、つぎにページに収まるように収集した題材を五つに絞り、さらにそれぞれの話題に見出しをつけて……というように、阿久悠日記の記述のプロセスや方法を『日記力』のなかで自らが具体的に解説していることは、本稿の「II 阿久悠日記の方法」ですでに触れたとおりである。また、独自のレイアウトのしかたについても、『日記力』のなかで、つぎに引用するように、極めて詳細に解説している。

日記を単なる備忘録にとどめず、のちに役立たせるためには、レイアウトの工夫も必要になります。僕は、内容に応じて黒ペンと赤ペンとオレンジのマーカーを使って、書きわけを行っています。

純粹な情報や、気象、その日の僕の行動などは、黒字で書きます。そして、テレビなり、ラジオなり、あるいは口コミで僕が受けた情報については、赤のラインで囲みをつくり、その中に黒字で書き込む。囲みの上端には、そこに書かれた内容が一目でわかるよう「NEWS」「SPORTS」「話題」などジャンルを記してあります。

これらの受けた情報の中でも、これはちよつと覚えておいたほうがいいぞ、というものは、黒字で記したあとと赤でアンダーラインを引きます。他にも、僕は人が語った言葉がひどく気になる性質（たち）なので、政治家などが、テレビやラジオで重大な発言をしたのを聞くと、その言葉を黒字でできるかぎり忠実に書き、やはり赤のアンダーラインを引いています。

（第一章）

長くなるのでこれ以上の引用は控えるが、このあとには、オレンジ色のマーカーの使い方や、歌詞のタイトルの候補となる言葉や創作のアイディアなどは赤ペンを用いて記すことなどの解説をさらに続けている。このように阿久悠は、自分の日記について縷々説明を加えたのだった。とすると、阿久悠日記はほかでもなく、阿久悠自身が著した『日記力』を通じて、より正確に理解できるということになるのである。

吉田悦志は、「阿久悠という作詞家ほど、自分の作品を自らこれほど大量に解説した人は、まずいまい」と指摘したが、事実、たとえば、都はるみが歌った『北の宿から』の、これまでの歌謡曲とは異なった新しい女性像について、阿久悠自らが積極的に解説していたことは、先に述べたとおりである。日記についても、同じようなことがいえるのではないだろうか。阿久悠ほど、自分の日記について詳しく解説した人はいない、と。

阿久悠『日記力』『日記』を書く生活のすすめ』を読む——自身による日記の解説と読者への遺言——（富澤）

VI 遺言としての『日記力』

『日記力』には、「『日記』を書く生活のすすめ」というサブタイトルが付けられている。阿久悠が「すすめ」る『日記』を書く生活」とは、どのようなものなのだろうか。この著書の末尾に、それは明確に記されている。著者の心情や姿勢をも理解するために、やや長くなるが、省略せずにその末尾の一節を引用してみよう。

人の記憶というのは、ひどく曖昧なものです。その曖昧なことが、日々書くことで、鮮明な記憶として積み重なっていく。この積み重ねによつて、ただ惰性で過ごすのではなく、自分の生きている「今」という時代が、どこへ向かおうとしているのか、その中で自分がすべきことは何か、あるいは何ができるのか、そんなことが徐々に見えてくるはずで、時間はかかるかもしれませんが、粘り強く続けていけば、日記を書く以前よりも、ずっと生き生きとした日々であることを実感するはずで、

そして、その日記こそが遺言であったり、自分史になり得るとも考えられます。もし、のちのち改めて自分史を書きたいと思つたときには、貴重な資料になるはずで、人任せの時代考証ではなく、自分の目で見て、耳で聴いて、皮膚で感じた時代を一冊、一冊の中に残していつてほしいと思います。

(第七章)

読者に対する著者のメッセージや願いが明快かつ率直に、しかも静かにではあるが情熱的に述べられている。このように真摯に、阿久悠は「『日記』を書く生活」を「すすめ」るが、それは、読者たちが生きている時代とこの時代

を生きる読者たちにとつての課題がともに明瞭になるからだという。

先に、「日記憲法五カ条」の最後におかれた第五条に、「今日があり、世界があり、そして、自分がありという書き方ができないか」という一文があり、稿者は、こうした姿勢は阿久悠のすべての仕事に通じるものだ、ということを書いた。すなわち、繰り返すようだが、作詞や小説、評論などに取り組みながら、自分が生きている現代とはどのような時代なのか、この時代に生きる自分とはどういう存在なのかを、阿久悠は一貫して問いつけた人物であった、と。

同じように、日記を、毎日毎日記しながら、阿久悠は現代という時代とそこおかれた自分の生き方について考え続けてきた。そして根気よく日記を継続することにより、徐々に時代というものが鮮明な輪郭を備えて見えるようになる経験は、彼に「生き生きとした日々」をもたらすことになったのだ。同じような経験を、読者たちもまたできるように願って、読者たち一人ひとりが捉えた時代を各自の日記のなかに残してほしい、と本書の最後に記したのである。

いま稿者は、こうした著者のメッセージや願いが率直に、また情熱的に述べられていると書いた。しかし一方で、「あとがき」のなかで、こつとも書いている。

何もかも舞台裏を見せてしまう感じで、いいのかそれで、企業秘密もあるのではないかという思いもないではないが、まあ、どうせここまで進んだのだから、最後まで公開してしまおうと決心する。

「日記憲法五カ条」が「作詞憲法十五カ条」に倣ったものであることは、先に述べた。「三十年もあとになって、その時にメモした阿久悠作詞家憲法を本に発表したのが、それまでは誰にも見せていなかったものである」と自ら述べた²⁵

阿久悠『日記力』『日記』を書く生活のすすめ』を読む——自身による日記の解説と読者への遺言——（富澤）

とおり、この「作詞家憲法」は長い間、公表されることはなかった。このメモ書きの「憲法」は、「白い蝶のサンバ」が大ヒットした一九七〇年と翌七一年の二年の間に制作されたようで、作詞家・阿久悠の「朝まで待てない」（一九六七年）のA面デビューから三年から四年後に当たる。そしてこれを基に表現を整えたうえで初めて公表したのが一九九四年発表の「怨からの脱出——私の歌謡曲作法」と題する文章においてであり、それまでは人前に明らかにすることはなかった⁽²⁷⁾、という。つまり、二三年から二四年の間、この「憲法」を胸の内に秘めたまま、作詞家としての自分を厳しく律する一方、この「憲法」に基づいて作詞をすることによって、オリジナルで新しい歌謡曲を創作し成功を収めてきたのだった。

このようにオリジナルであることに強くこだわり続けてきた阿久悠であれば、なおさら、独自の日記の書き方を公開することに対して抵抗感があったことは、むしろ当然のことといえるにちがいない。にもかかわらず、それでもあえて舞台裏までも公開してしまおうと決意するにいたったのは、読者に対する深い愛情ゆえのことであるだろう。しかし、と同時に、自分の人生の終幕がそう遠いことではないことを、認めないわけにはいかないような状況に彼がおかれていたことも、大きな理由であるように考えられるのである。『日記力』を執筆している時点から二年前のことを回想して、『日記力』のなかでつぎのように書いている。

僕は、二〇〇一年の夏に癌が見つかりました。

(第五章)

僕は、九月に入りスケジュール調整をして、十日に病院に入院しました。(中略)翌十一日には(中略)その日の日記を書いた、その直後、(中略)ぼんやりテレビを見てみると、世界を震撼させる大事が伝えられたのです。

九月一日の夜、病室でぼんやりとテレビを見ていた阿久悠が目にした「世界を震撼させる大事」とは、言うまでもなく、二〇〇一年、アメリカで起きた同時多発テロ事件のことである。

日記によると、腎臓癌の疑いを告知されたのが二〇〇一年八月五日、入院した日は九月一〇日、腎臓の摘出手術は同じ九月二一日のことだった。このように二〇〇一年の夏から秋にかけて、阿久悠は文字どおり、自分の生命の危機と世界の危機とをともに痛切に感じていたのだった。それから二年後、阿久悠が闘病生活を送るなかで構想され記されたのが、この『日記力』という著書だったのである。このようなことから、先に見たような読者に対する真率で情熱的なメッセージを末尾に記した本書は、同じ時代を生きる読者に向けた阿久悠の「遺言」でもあったように思われるのである。

『日記力』の「あとがき」のなかで、阿久悠は、当時現役の野球選手だった松井秀喜に触れている。

ニューヨーク・ヤンキースの松井秀喜は、今日(二〇〇三・六・四)——括弧内稿者 も無安打であった。真面目であることは自分を金縛りにしてしまうが、不真面目さゆえの気楽さよりは、はるかに未来がある。力と心を信じなさい。

周囲の期待に応えようとすればするほど、かえって身体は過剰な反応を起こして硬直してしまい、その結果、通常の実力を発揮できないということがあるものだ。だが、それは責任感の強さと真面目さゆえに生じることである。自

阿久悠『日記力』『日記』を書く生活のすすめ』を読む——自身による日記の解説と読者への遺言——(富澤)

分はこうした事情をよく分かつており、そしてその強固な責任感と真摯な姿勢を評価しているので、自分を信じてプレーを続けてほしい。ヒットやホームランを打てずに苦しむ松井選手に対して、阿久悠はこのような応援の言葉を贈っている。しかし、この応援は松井選手にだけ向けられたものではないようにも感じられる。これは阿久悠から、同じ時代を生きる私たち読者に対して贈られた応援歌なのではないだろうか。力と心を信じてそれぞれの人生を歩んでいってほしい——これもまた、阿久悠の「遺言」でもあるにちがいない。

これまで、阿久悠が晩年に著した『日記力』『日記』を書く生活のすずめ』について検討してきた。この著書は、自分の死後、長期にわたって記してきた自身の日記が後世の人々に正確に理解されることを願って書かれた、阿久悠日記のための優れた解説書であると同時に、これまでの自分の仕事や思想を集約して提示した著述でもあり、また現代の読者たちへの激励のメッセージ・遺言の書でもあった、と考えられるのである。

注

- (1) ただし、実際の二〇〇三年の阿久悠日記の一月八日のページには、「11時から、講談社アルファ新書・書き下ろし『真夜中の一人編集会議——ぼくの日記学』のロングインタビュー」と記されているので、『日記力』のなかで示された「一月七日」という日付は誤記の可能性もあるだろう。
- (2) 二六年七月月にわたって毎日記された阿久悠日記のなかで、唯一の例外は、病状が深刻化した二〇〇七年七月月に入ったの二週間ほどの間で、そこには一切記述のない白紙のページも確認される。
- (3) 三田完『不機嫌な作詞家 阿久悠日記を読む』（文藝春秋、二〇一六・七）、一六六ページ。
- (4) 阿久悠『生きつばなしの記 私の履歴書』（日経ビジネス人文庫、二〇〇七・一二）では、「作詞家憲法」（傍点稿者、一六〇ページ）と記されているが、本稿では『日記力』の表現に倣って、「作詞憲法」としておくことにする。
- (5) 阿久悠『愛すべき名歌たち』（岩波新書、一九九九・七）、二〇八〜二〇九ページ。
- (6) (4)に同じ。一六〇ページ。

- (7) 吉田悦志「阿久悠——人と作詞作品——」(明治大学史資料センター『大学史紀要』第一九号、二〇一四・二二、八六ページ)。
- (8) 阿久悠『無冠の父』(岩波書店、二〇一・二〇)、「第三章 俳句」、一一九ページを参照。
- (9) (7)に同じ。四二ページ。
- (10) 『石川啄木全集 第五巻 日記Ⅰ』(筑摩書房、昭五三・四)、五ページ。
- (11) 『石川啄木全集 第六巻 日記Ⅱ』(筑摩書房、昭五三・六)、二四七ページ。
- (12) 池田功『啄木日記を読む』(新日本出版社、二〇一・二二)、一〇ページ。
- (13) 池田功『石川啄木入門』(桜出版、二〇一四・一)、一四三ページ。
- (14) ドナルド・キーン／金関寿夫訳『百代の過客(続) 日記に見る日本人』(講談社学術文庫、二〇二二・四)、五六〇ページ。
- (15) (14)に同じ。五六五ページ。
- (16) (14)に同じ。五七六ページ。
- (17) (11)に同じ。一三〇～一三二ページ。
- (18) 深田太郎と三田完の対談「阿久悠日記全二十七冊を読む」(『文藝春秋』第70巻第9号、二〇一六・八)。
- (19) 宮崎大四郎(郁雨)「啄木の日記と私(序に代へて)」(『石川啄木日記 第一巻』、世界評論社、昭23・11、所収、一ページ)。
- (20) 長浜功は『啄木日記』公刊過程の真相 知られざる裏面の検証(『社会評論社』、二〇一三・三)のなかで、「この言葉(本稿の本文中で引用した、「啄木は焼けと申したんですけど、私の愛着がさうさせませんでした」を指す。括弧内稿者)は、この日記は啄木と私の一番大切な唯一の形見ですから決して焼かないで下さい」という意味だと郁雨が受け止めたことを見るのが自然であろう。すなわちこの瞬間に啄木の日記が焼却すべきものではなくなったのだった(『五五〇五六ページ』)と述べ、節子とともに、宮崎郁雨もまた啄木日記の保管と公刊に大きく寄与した人物だったことを指摘している。
- (21) 石川正雄「日記公刊まで」。(19)の『石川啄木日記 第一巻』所収。八ページ。
- (22) (13)に同じ。一四八ページ。
- (23) ドナルド・キーン／金関寿夫訳『百代の過客 日記に見る日本人』(講談社学術文庫、二〇一・一〇)、二二ページ。
- (24) (7)に同じ。一〇二ページ。

阿久悠『日記力』『日記』を書く生活のすすめ』を読む——自身による日記の解説と読者への遺言——(富澤)

- (25) (4) に同じ。一六〇～一六一ページ。
(26) 青木保ほか編『近代日本文化論 5 都市文化』(岩波書店、一九九四・四)所収。
(27) (4) に同じ。一五九～一六一ページを参照。

〔付記〕 本稿は科学研究費補助金(平成28年度 基盤研究(C) 課題番号16K02022)による研究成果の一部である。